

4. チャシ跡について

今回の調査で発見されたチャシ跡は、沢と石狩川の段丘崖にはさまれた舌状地の先端部を一条の壕で区画したもので、丘先式のチャシに分類される（河野広道、1958）。このチャシ跡についての伝承や過去の調査記録は今のところみあたらない。石狩川流域の神居古潭から雨竜川合流点までには、これまで13カ所のチャシ跡が確認されているが、今回の調査によってまた一つが加わったことになる。本稿では、これを「内園2チャシ跡」と仮称する。

このチャシ跡は、石狩川と雨竜川との合流点から直線距離で22kmほど遡った地点に位置している。ここは、神居古潭の溪谷を出て西流する石狩川が一旦南に、そして北西方向へと再び流路を変えはじめる地点で、流速も緩やかになり砂州の形成もみられる。チャシが立地する台地は、現在石狩川と12mほどの比高があり、平均水位時の汀線から200mほど離れている。しかし、昭和5年作成の五万分の一地形図や昭和23年撮影の空中写真と現在の汀線を比較すると石狩川が右岸方向（納内側）へ徐々に流路を変えている様子がみられ、以前は今より左岸（内園側）に汀線が寄っていた可能性がある。チャシが立地する台地の南側にある沢は、『深川市史』（1977；P. 261）の図にみられる「古川」に相当するものと思われる。

内園2チャシ跡の調査で得られた知見を列記すると次のようになる。

1. 石狩川の段丘崖と沢で挟まれた台地の先端部を1条の壕で区画する丘先式のチャシ跡であること。
2. 壕の一部を掘り残したかたちの橋状遺構が確認されたこと。
3. 柵の配列と橋状遺構の位置関係からみると、ここに通路があった可能性があること。
4. 壕底の等高線からみると、壕の掘削には少なくとも8工程があったと推定されること。
5. チャシ跡主体部に、チャシよりも古いとみられる竪穴が存在すること。

このチャシ跡は河野広道氏の分類を基本として、これをさらに細分した後藤秀彦氏による分類（後藤、1984）にあてはめると、第Ⅳ群a類（突出する台地の広がり大きいもので、単壕のもの）に相当しよう。また、橋状遺構についても後藤氏がまとめられており、内園2チャシ跡のものは、ruyka-A（壕の一部を完全に断ち切って作出するもの）の臨川性にあたる¹⁾（後藤、1980）。同様の橋状遺構は、弟子屈町のサンペコタンチャシ跡に発掘例があり²⁾、チャシ主体部からみた位置にも内園2チャシ跡と共通点がみられる。サンペコタンチャシ跡では、壕に沿った柵列跡が検出されている。そして、橋状遺構に対応する部分の柱穴間隔が他よりも広いことから、主体部への通路と考えられている（松田猛、1977）。前述したように内園2チャシ跡の柵列に通路と想定される部分があるが、本例の場合、橋状遺構から続くその形はカギ状になっている。あたかも、城郭でいう「枳形」を想起させる。

本チャシ跡の壕の掘削には8工程があったと想定される。1工程の長さは3m前後のものが多。釧路町遠矢第2チャシ跡（福田友之、1975）の平均1.73m、サンペコタンチャシ跡の平均約1.5mよりも長い。東壕東端部では壁に凹凸がみられることから、より細かい掘削工程があった可能性もある。壕の掘削工程について西幸隆氏は「遠矢パターン」として位置付けた上

丘先式のチャシは各々4～5kmの距離をおいて分布している。これに対し、面崖式のチャシは1km内外の距離しかもたず、納内3丁目チャシ跡から神居古潭チャシ跡までの4.5kmの間に集中している。

後藤秀彦氏はチャシの分類の細分化を試みる中で、「(チャシの)形態は立地を規制し、立地は形態を規制することになり、同時に形態と立地は、目的・用途・機能等を基礎とした強い規範の中で決定される」ものであり、チャシを考えるにあたって、立地のほか、人為的関連(コタン・入会地・交通路・イオルなど)からの検討やチャシを取りまく小地区の検討が基礎となると述べている(後藤、1984)。また、チャシの変遷については、丘頂式・孤島式→丘先式→面崖式というおおまかな流れが考えられている(宇田川、1980・後藤、1984)。ここでは、丘先式と面崖式との対比の中で、この地域にあるチャシ跡の立地と分布をみてきた。丘先式のものにくらべ、面崖式のものがかかなり集中していることが明らかとなったが、面崖式の中にも納内5丁目チャシ跡のように形態や立地に違いをみせるものがあり、この地域にあるチャシ跡がすべて同時期の所産かどうか検討する必要がある。内園2チャシ跡についてみれば、主体部の面積が約130㎡と規模が小さく⁶⁾、音江チャシ跡(約700㎡)・出合沢チャシ跡(約1,200㎡)と同列に扱うことができるかという問題が残る。また、三方を石狩川に囲まれた河岸段丘の上流側に位置するという立地からも、面崖式のそれと共通する部分があり、内園2チャシ跡と分水嶺を挟んである内園チャシ跡との関係も考えなくてはならない問題である。(田中哲郎)

注1 後藤氏のあと、小山田真弓氏がルイカ構造をもつチャシの機能について、チャシの面積に着目して論考している(小山田、1980)。内園2チャシ跡は、小山田氏の ruyka-A の a 群(1条壕)に相当する。この a 群については、面積が小さいことが指摘されている。

注2 平取町ポロモイチャシ跡で2条の壕が発見されている(田中哲郎・寺崎康史、1986)。この2本の壕は、1.6mほどの間隔を残しており、連続していない。これも橋状遺構と捉えられようか。

注3 『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』(高橋ほか、1986)で、ⅢH-7(田中、P. 130)の事実記載と、建物跡についての総括の記述と食い違う部分がある。ⅢH-7については、覆土中にみられた白色火山灰を苫小牧火山灰と考え、10世紀以前のものとした。

注4 本堂寿一氏は、石狩川流域にあるチャシ跡について、漁獵域との関連のほか、交易路との関係を示唆している(本堂、1977)。

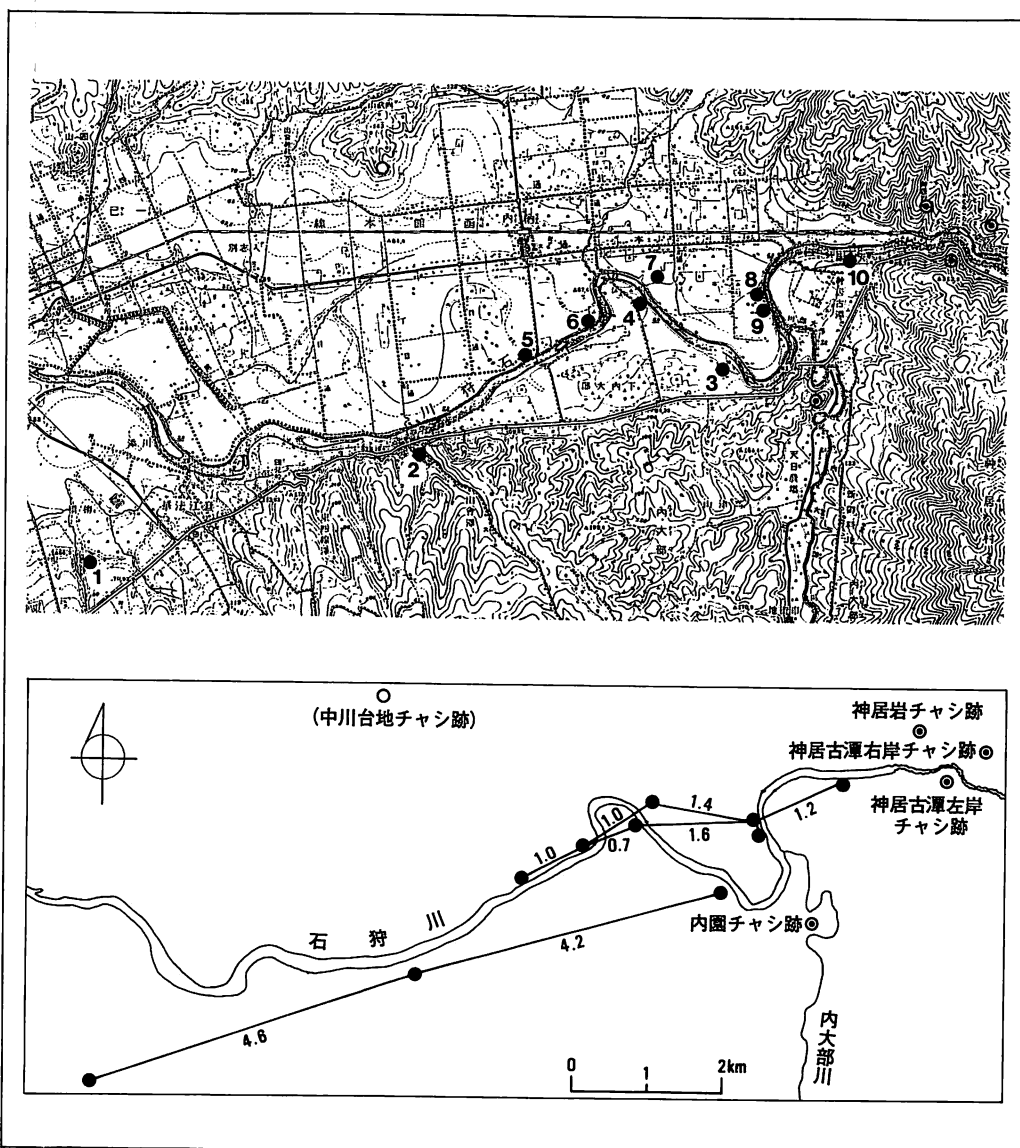
注5 中川台地チャシ跡は、道教委文化課包蔵地カードに登録されている(本報告書P. 15を参照)が、不確実さが残るため、加えていない。

注6 本チャシ跡の西側・東側がそれぞれ削られていることは、前に述べたとおりであるが、地形からみて旧状の面積が現状より大幅に広がったとは考えられない。

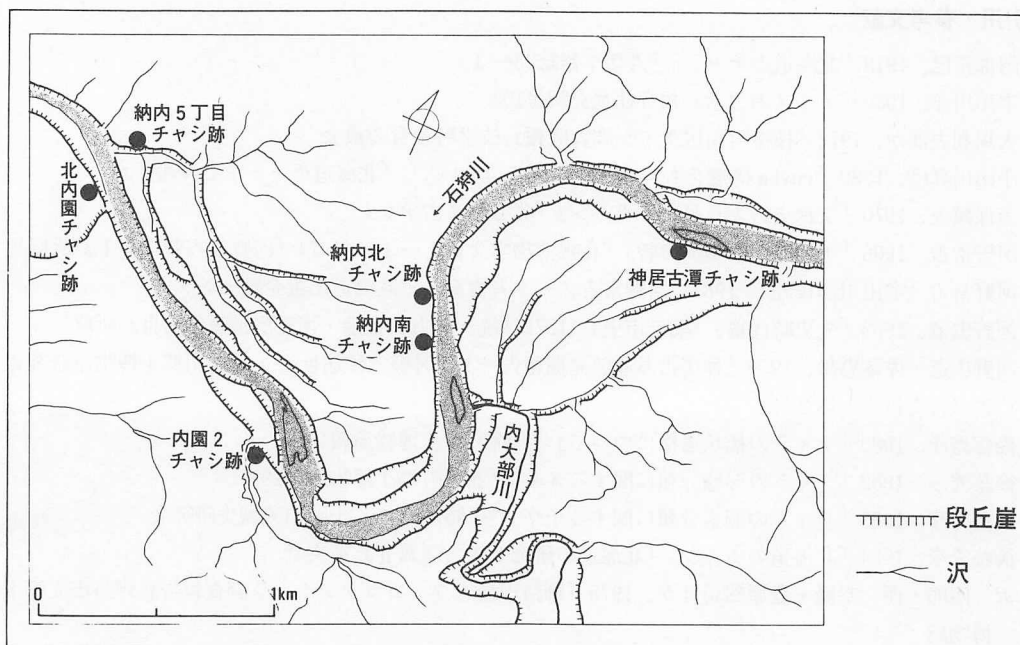
番号	チャシ跡名	形態	壕の形状と数など	立地	標高	比高
1	音江	丘先式	直状・1条	石狩川左岸・待合川右岸・段丘舌状部先端	67 m	15 m
2	出合沢	"	"	石狩川左岸・出合沢に開折された舌状台地北端	70	10
3	内園2	"	弧状・1条・橋状遺構	石狩川左岸・沢に開折された舌状地の先端	71	12
4	北内園	面崖式	半円形・2条	石狩川左岸・段丘縁辺部	55	20
5	納内3丁目	"	"・1条	石狩川右岸・段丘縁辺部	60	10
6	納内4丁目 ^(注)	"	"・2条	石狩川右岸・段丘縁辺部	60	6
7	納内5丁目	"	鉤形の壕とくの字状に区画された2郭	石狩川右岸・段丘縁辺部	70	20
8	納内北	"	半円形・1条	石狩川右岸・段丘縁辺部	65	20
9	納内南	"	"・1条	石狩川右岸・段丘縁辺部	65	20
10	神居古潭	"	"・1条	石狩川左岸・段丘縁辺部	70	10

(注) 阿部正巳(1918)の論文では、壕は3条と紹介されている。

表Ⅵ-1 チャシ跡一覧表

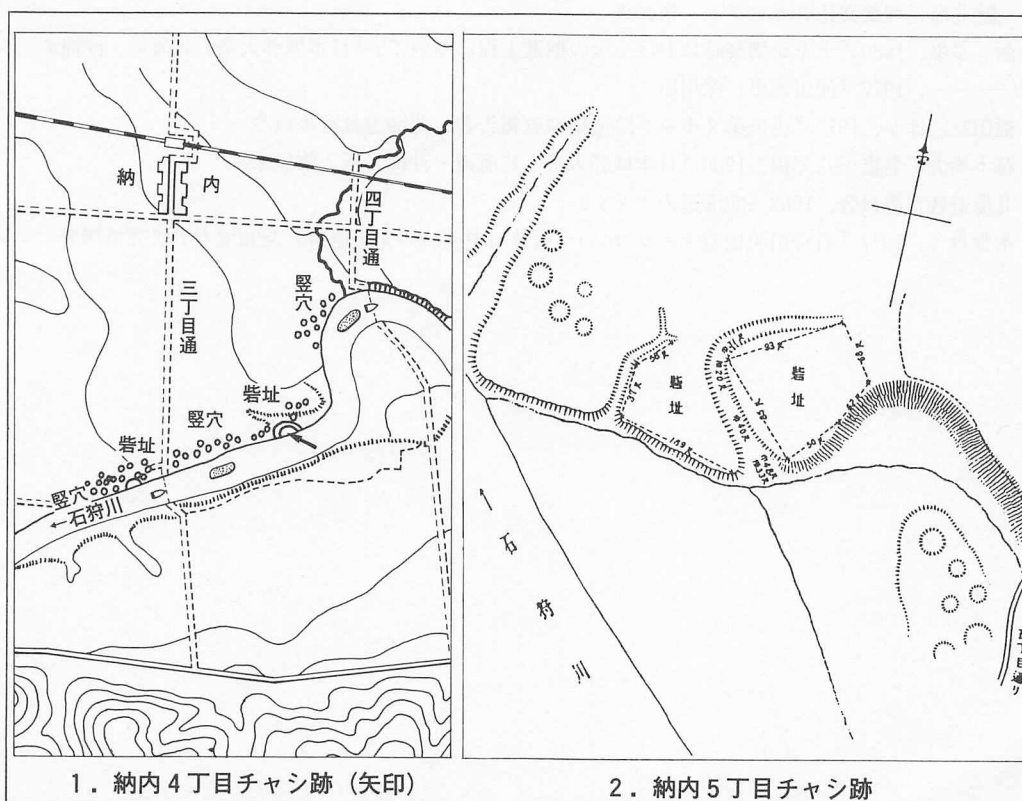


図Ⅵ-3 周辺のチャシ跡とその距離 (この図は昭和5年大日本帝国陸地測量部発行の5万分の1地形図「深川」を使用したものである。)



図Ⅵ-4 空中写真からみた地形とチャシ跡の位置

(地形図作成にあたっては現地踏査や偏位修正を行っていない。)



図Ⅵ-5 河野常吉氏の測量図 (『北海道史』1918)にみられるチャシ跡 (一部再トレースした)